

## 沖縄における12・13世紀の中国陶磁器

金 正 紀

(沖縄県立博物館)

Chinese Ceramics of the 12th-13th Centuries Found in OKINAWA

Seiki KIN

(Okinawa Prefectural Museum)

### 一 は じ め に

沖縄出土の中国陶磁器で最も古いのは、西表島の古墓で見つかったと言われている長沙窯の「黄釉綠褐彩碗」である。これは唐代（およそ9世紀）の長沙窯碗と報告されている。<sup>(1)</sup>

この碗は墓荒しの手によって取り出されたものであり、その墓も明らかでない。伝世品の可能性が強いが、近年、西表島や石垣島の無土器遺跡から開元通宝<sup>(2)(3)</sup>が検出されており、開元通宝（621年初鑄）と一緒に持ち込まれた可能性もあり、今後の成果に期待したい。

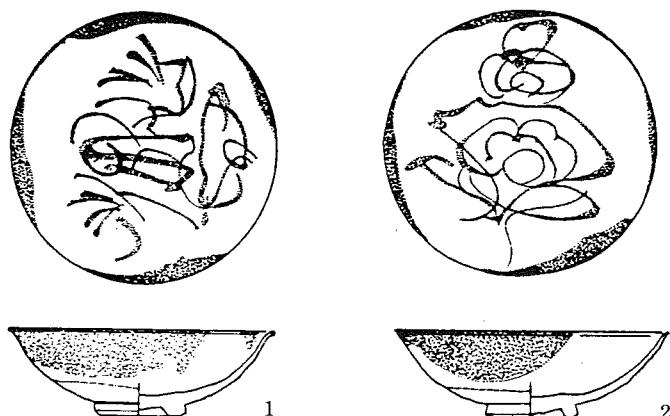


Fig. 1 長沙窯黄釉綠褐彩碗（西表古墓出土）〔東京国立博物館蔵〕（縮尺1/4）

考古学の発掘調査では、9・10世紀代の中国陶器はこれまでに1片も検出されていない。最も古いものは11世紀末～12世紀前半の白磁碗である。1978年1月、熱田貝塚の発掘調査で白磁玉縁碗、白磁端反碗などが検出され<sup>(4)</sup>、11世紀末～12世紀前半には確実に中国陶磁器が沖縄へ入っていることがわかった。その後の調査で、これらの古い中国陶磁器の出土例が増加した（第1表）。

沖縄出土の中国陶磁器については、多和田真淳<sup>(5)</sup>、三上次男<sup>(6)</sup>、亀井明徳<sup>(7)</sup>、矢部良明<sup>(8)</sup>、知念勇氏<sup>(9)</sup>など多くの研究者が発表している。しかしそれらは、沖縄各地で大量に出土する14～16世紀の中国陶磁器を中心であり、13世紀以前については概観程度にふれているだけである。そこで今回は、12・13世紀の中国陶磁器について具体例を呈示しながらまとめてみたい。なお、タイトルが「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」となっているが、11世紀末～12世紀前半とか、13世紀末～14世紀前半などとまたがって編年されているものは12・13世紀に含めた。

## 二 出土状況

12・13世紀の中国陶磁器については、1961年に多和田氏が、「沖縄列島土陶磁器出土地一覧表」の中で「南宋～元」とか「南宋」とか表現している<sup>(5)</sup>。写真や実測図がないのでどのタイプの中国陶磁なのかは明らかでないが、28遺跡採集の中国陶磁器198点について時代区分しており、特筆される。

1966年、嵩元氏が「ヒニ城の調査報告」に、はじめて実測図を掲載した<sup>(10)</sup>。その中に青磁櫛描文皿（珠光青磁）、青磁鎧蓮弁文碗、白磁口禿皿などが含まれており、13世紀の中国陶磁が明確にされた。それから12年後の1978年、熱田貝塚の発掘現場でヒニグスクの資料より古い中国陶磁器が検出され、沖縄における古い中国陶磁器が特に注目されるようになった。

その後、発掘調査や遺跡の分布調査などが進み、現在は第1表のような出土状況になっている。ここに掲載したのは白磁玉縁碗、白磁端反碗、青磁櫛描文碗・皿（珠光青磁）、青磁劃花文碗など明確に12・13世紀に編年される中国陶磁器が出土している遺跡だけをまとめた。しかし、それがすべて12・13世紀の遺跡ということではない。例えば、新里村（西）遺跡のように新里村（東）遺跡からの伝世品と考えられるものや、今帰仁城跡志慶真門郭のように主郭（俗称本丸）から投げ捨てられたものや伝世品と考えられるものもある。

なお、第1表に掲載したのは、報告されているものを中心としたが、未報告で個体数がわからないものについては◎印で示した。

第1表 沖縄における12・13世紀の中国陶磁器出土一覧

器種 遺跡名	白磁玉縁 碗I	白磁玉縁 碗II	白磁端反 碗	珠光青磁 碗皿	青磁割花 文碗	白磁擲目 文碗	白磁口折 碗	青白磁 合子	白磁口禿 碗皿	青磁鎬蓮 弁文碗	白磁ビロー スクタイプ 碗I	白磁ビロー スクタイプ 碗II
熱田貝塚	9	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大泊浜貝塚	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
新里村(東)遺跡	1	5	1	0	0	0	0	0	1	0	0	6
ピロースク遺跡	0	5	0	0	1	56	0	0	0	1	5	13
サーク原遺跡	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
伊良波東遺跡	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
伊波後原遺跡	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
稻福遺跡	0	10	0	12	0	12	0	0	0	18	0	22
勝連城南貝塚	0	1	0	1	0	2	0	0	0	0	4	0
神山遺跡	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
拝山遺跡	0	1	0	1	8	15	0	0	4	11	26	0
佐敷グスク	0	2	0	0	0	0	1	0	0	3	5	0
越來グスク	0	2	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0
大里伊田慶名原遺跡	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0
親富祖遺跡	0	3	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1
伊原遺跡	0	1	0	1	0	0	0	1	0	2	13	0
波名城古島遺跡	0	3	0	0	2	0	0	0	1	0	1	0
竿若東遺跡	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
喜友名山川原第6遺跡	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
南山城跡	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
阿波根古島遺跡	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山原遺跡	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0
真久原遺跡	0	1	0	0	0	2	0	0	0	3	4	0
新里村(西)遺跡	0	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	30
屋良グスク	0	◎		◎	◎	◎				◎		
ヒニグスク	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0
クードー遺跡	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
我謝遺跡	0	0	0	0	3	4	0	0	1	3	1	0
野城遺跡	0	0	0	1	3	1	0	0	1	0	0	3
今帰仁城跡(志慶真門郭)	0	0	0	0	1	0	0	0	1	6	3	0
浦添城跡	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0
フェンサ城貝塚	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
高腰城跡	0	5	0	3	3	11	0	0	0	1	2	5
合計	12	65	6	20	22	105	1	1	2	8	59	81
												159

◎は未報告で個体数がはっきりしないもの

### 三分類

これまでに沖縄各地で検出された12・13世紀の中国陶磁器の分類と編年を試みた。復元資料が少なくて、分類資料として十分ではないが、その点は横田賢次郎・森田勉氏の「大宰府出土の輸入中国陶磁について—型式分類と編年について—」<sup>(11)</sup>の分類を参考にした。

#### 1. 白磁

12・13世紀の白磁として、玉縁碗（碗Iと碗II）、端反碗、櫛目文碗、口折碗、口禿碗と皿、ビロースクタイプ碗（碗Iと碗II）等と仮称して分類した。なお、碗と皿はセットとして分類した。

##### ① 玉縁碗

碗I 薄手で玉縁も小さい。口縁直下に釉垂れが多い。図上復元した3の資料は熱田貝塚出土である。碗IIよりは胴部が僅かに脹らむ器形で、高台割りが深い。薄い釉を内底から外面腰部まで施釉し、腰部から外底までは露胎である。熱田貝塚と大泊浜貝塚の資料は層序的に把握されており、好資料である。<sup>(12)</sup>

碗II 碗Iに比して厚手で、玉縁も大きいタイプである。腰部から口縁部へ逆ハの字状に開き、高台割りが浅い。内底から外面腰部まで施釉し、腰部から外底までは露胎である。<sup>(13)</sup>8の伊波後原遺跡出土と9の新里村（西）遺跡出土は、碗IIの代表的資料である。<sup>(14)</sup><sup>(15)</sup>

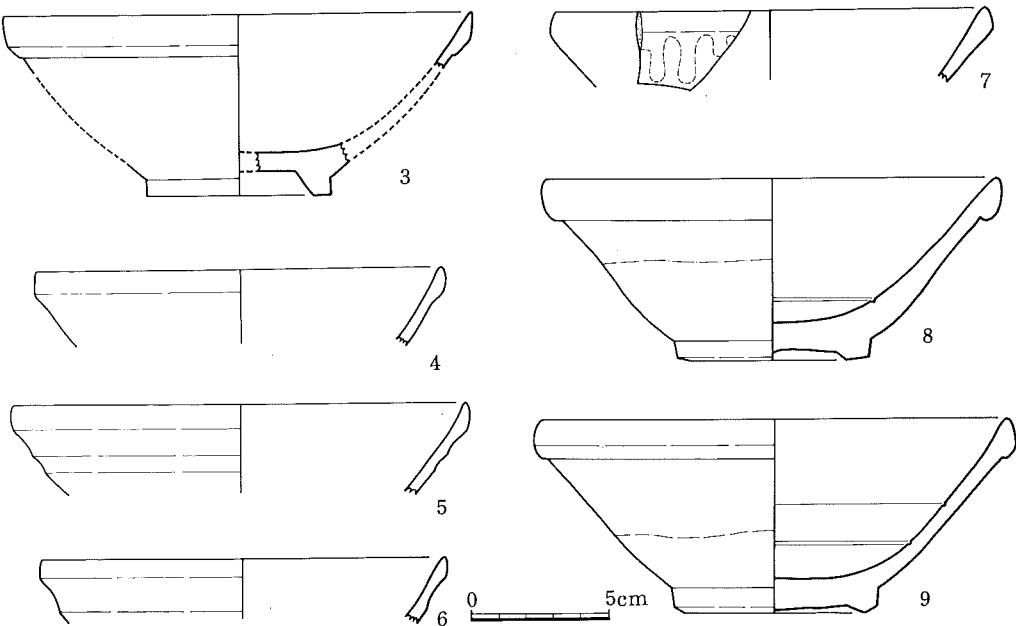


Fig. 2 白磁玉縁碗 I (3~7) · II (8·9) [熱田貝塚 3~5, 大泊浜貝塚 6, サーク原遺跡 7, 伊波後原遺跡 8, 新里村（西）遺跡 9]

## ② 端反碗

薄手の碗である。口縁部は外反し、高台は薄くて高い。薄い釉を内底から高台脇まで施し、高台脇から外底までは露胎である。10と11は熱田貝塚出土の資料を図上復元したものである。熱田貝塚や大泊浜貝塚で玉縁碗Iとの共伴遺物であり、層序的にしっかりした資料である。

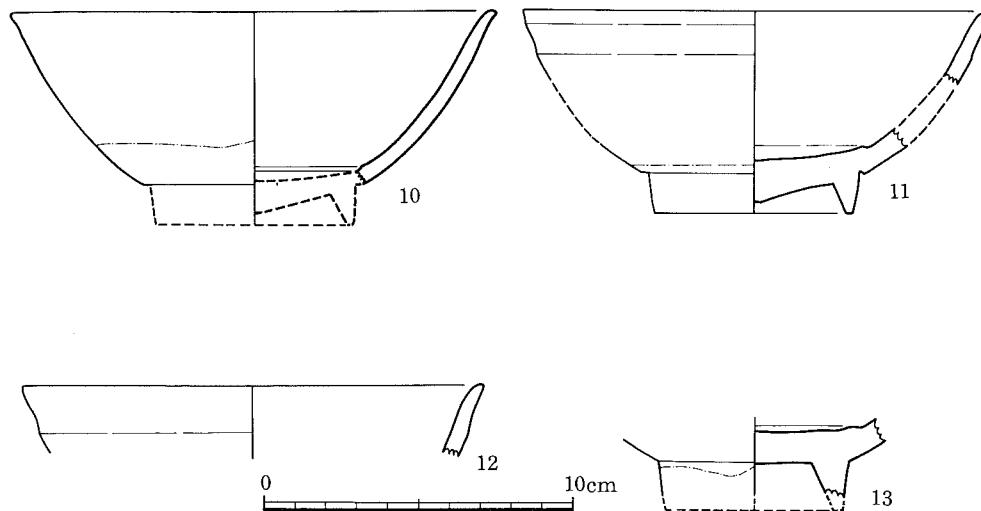


Fig. 3 白磁端反碗〔熱田貝塚 10・11, 大泊浜貝塚 12, 新里村(東)遺跡 13〕

## ③ 櫛目文碗

体部外面に櫛目文を施した高台の高い端反碗である。この櫛目文碗は佐敷グスクで1点検出されているだけである。「素地は堅緻で淡い灰白色を呈する。釉は緑色味を帯びた白色を呈し、全体的にうすく均一にかけられている」と報告されている。参考2は大宰府史跡出土で、横田・森田編年のV類2bにあたる。

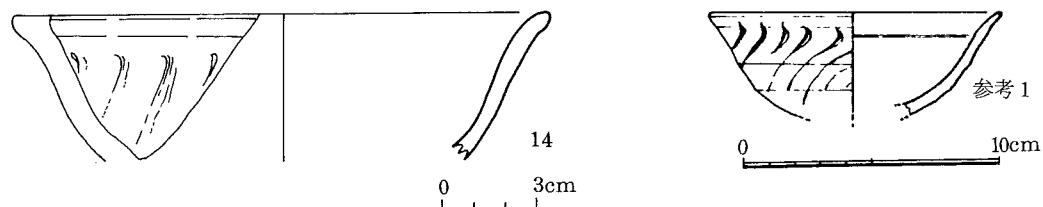


Fig. 4 白磁櫛目文碗〔佐敷グスク 14, 参考1は大宰府史跡〕

## ④ 口折碗

口縁部が外側に折れて、口唇は平坦に仕上げられている碗である。現在のところ伊原遺跡で検出された1点だけである。<sup>(17)</sup>今後の検出に期待したい。横田・森田編年のVII類3にあたると考えられる。

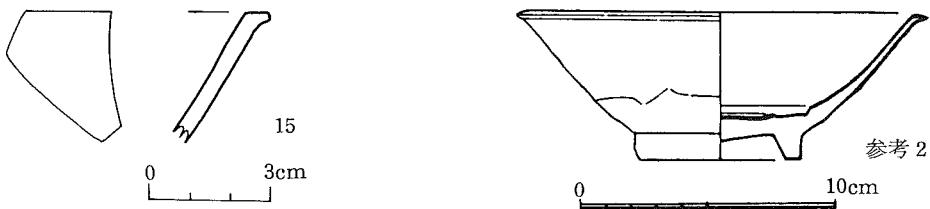


Fig. 5 白碗口折碗〔伊原遺跡 15 , 参考 2は大宰府史跡〕

##### ⑤口禿碗・皿

口禿には碗と皿がある。これまでの出土例を見ると碗より皿の方が多い。口唇部から内面頂部までの釉を掻き取って口禿としているのが最も大きな特徴である。

碗 I 直口口縁の小碗である。16は新里村(東)遺跡第II層の出土で、現在のところ最も古いと考えられる口禿碗である。高台は欠損しているが、施釉は碗 II とほぼ同じと考えられる。

碗 II 口縁部が外反する碗である。17の碗は今帰仁城跡出土で、復元資料としては現在のところ唯一である。外面の高台脇から外底までは露胎である。<sup>(18)</sup>

皿 I 浅皿で、口縁部は外反し、腰部に稜をもつ。全面施釉のあと口唇部から内面頂部までの釉を掻き取っている。底はベタ底だが、僅かに上げ底になっている。

皿 II 直口口縁の浅皿である。施釉方法は皿 I と同じである。底も皿 I と同じ。

皿 III 口縁部が外反する深皿である。施釉方法や底づくりは浅皿と同じである。

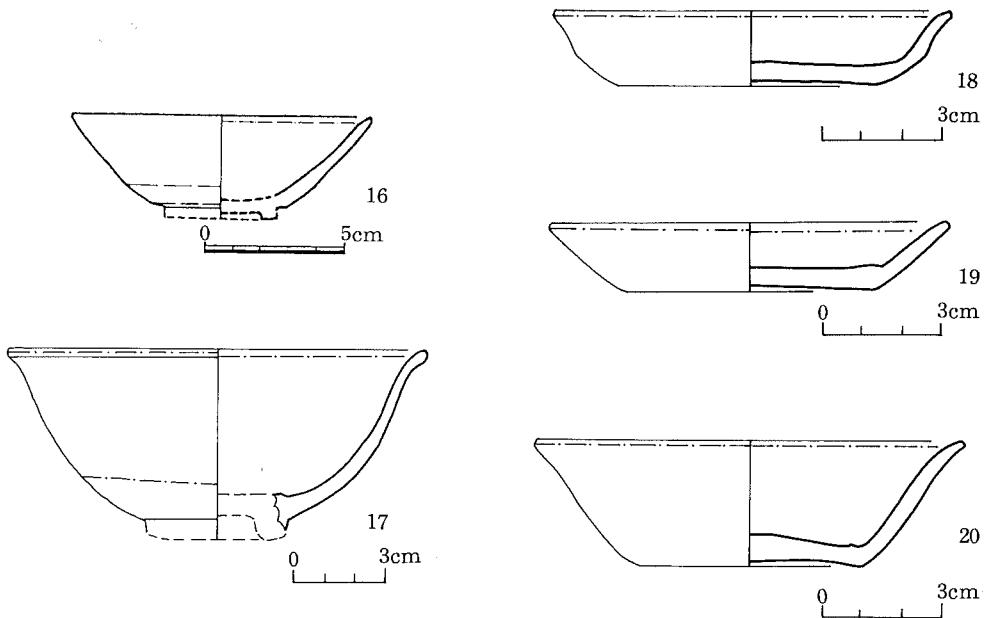


Fig. 6 白磁口禿碗・皿〔新里村(東)遺跡 16, 今帰仁城跡 17~20〕

#### ⑥ ビロースクタイプ碗

筆者はこの碗について、「基本的には厚手の内彎型碗である。素地は白色及び黄白色の微粒子である。畳付けは幅が広く、水平に切られている。器表面にはロクロ痕が稜線状に廻っているのが多い。釉は薄く、内底から外面の腰部か高台脇まで施釉されている。このビロースクタイプを口縁部の形態と圏線、文様などの有無によって2つに分けられる」とした。<sup>(20)</sup>

碗I 「基本的には内彎型であるが、口唇内端を丸くし、口唇直下の外面を指でおさえロクロをまわし、口唇部外端を尖らしている。内面上部には陰圏線を1本廻らし、下部には櫛描き文のあるものも見られる」。<sup>(20)</sup> 21と22が碗Iである。

碗II 「一般にビロースクタイプと呼んでいるのは、このタイプIIである。内彎する碗で、口唇は丸みをもち、口唇内端は内向し、稜を示すのが多い」。23と24が碗IIである。

このビロースクタイプが層序的に把握されたのはビロースク遺跡第II層（12世紀末～13世紀）、新里村（東）遺跡第II層（12世紀末～13世紀）、今帰仁城跡主郭第9層（13世紀末～14世紀初）などである。<sup>(21)</sup>

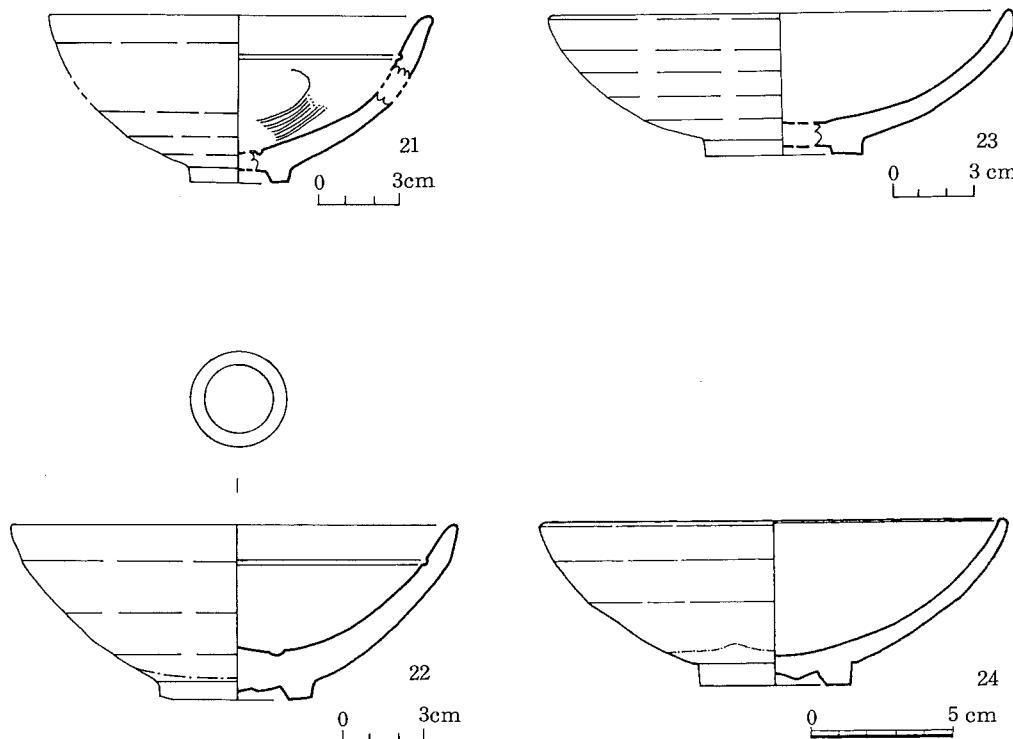


Fig. 7 白磁ビロースクタイプ碗 [ビロースク遺跡 21～23、新里村（西）遺跡 24]

## 2. 青磁

12・13世紀の青磁として、櫛描文碗・皿、劃花文碗、鎬蓮弁文碗、無文輪花碗、腰折杯、口折皿などと仮称して分類した。なお、器種はちがっても櫛描文の碗と皿のようにセットとして考えられるものはセットとして分類した。

### ① 櫛描文碗・皿

同安窯系の青磁で、一般に珠光青磁と呼ばれている一群である。櫛描文の出土例は10遺跡以上あるが、ほとんど1・2点の出土である。その中で稻福遺跡の碗12点と拝山遺跡の皿<sup>(22)</sup>8点は注目される。<sup>(23)</sup>

碗 復元資料がないので、大宰府史跡の資料(参考3)を掲載した。25は稻福遺跡の資料であるが、文様構成は参考3とほぼ同じである。内体面には籠や櫛などの施文具で花文などを描き、外体面には縦の櫛目文が施文されてるのが多い。しかし、内体面には文様があつて、外体面には文様がないものや、その逆などもある。高台で見ると若干の違いがあるので、高台造りにはいくつかの種類がある。

皿 皿は碗に比して出土例が多い。高台のないベタ底であるが、若干上げ底になっているのが多い。籠や櫛などの施文具を使って内底に施文してある。文様構成は碗の内面の文様とほぼ同じである。28は拝山遺跡出土の資料であるが、図上復元できる資料として数少ない資料の一つである。

### ② 劇花文碗

龍泉窯系の青磁で、劃花文とか刻花文とか呼ばれている一群である。現在のところ10遺跡で検出されているが、ビロースク遺跡の56点<sup>(21)</sup>、拝山遺跡の15点<sup>(23)</sup>などが注目される。

ビロースク遺跡出土の31と、クードー遺跡出土の32は全体が把握できる好資料である。31は内体面に蓮花を片切り彫りで表現している。32は同じく内体面に蓮弁を片切り彫りで描いている。31と32は文様の違いはあるが、器型や施釉方法などは同じである。脹らんだ腰部から口縁部へ直線的に開き、先端部は細くなり尖る。高台削りは浅く畳付は水平で広い。全体的に均整のとれた碗である。やや厚い釉を内底から高台外面まで施釉され、畳付から外底までは露胎である。

内底を見ると、39・40のように内底面と内体面の界に幅広の陰圈線を廻らし、内底が盛り上がった状態になっているのが多い。また、37・38のように内底に捻花を片切り彫りや平彫りしたもの、36のように「金玉満堂」の字があるもの、39・40のように籠で花文を彫ったもの、31・32のように文様のないものなどいろいろある。

35は我謝遺跡出土の資料であるが、口縁に刻みを入れた輪花碗である。劃花文碗で輪花碗になっているものは、大宰府史跡から出土している<sup>(11)</sup>。それを見ると、32のクードー遺跡出土の碗と同じ碗に刻みが入っている。したがって32タイプには輪花口縁と平口縁が

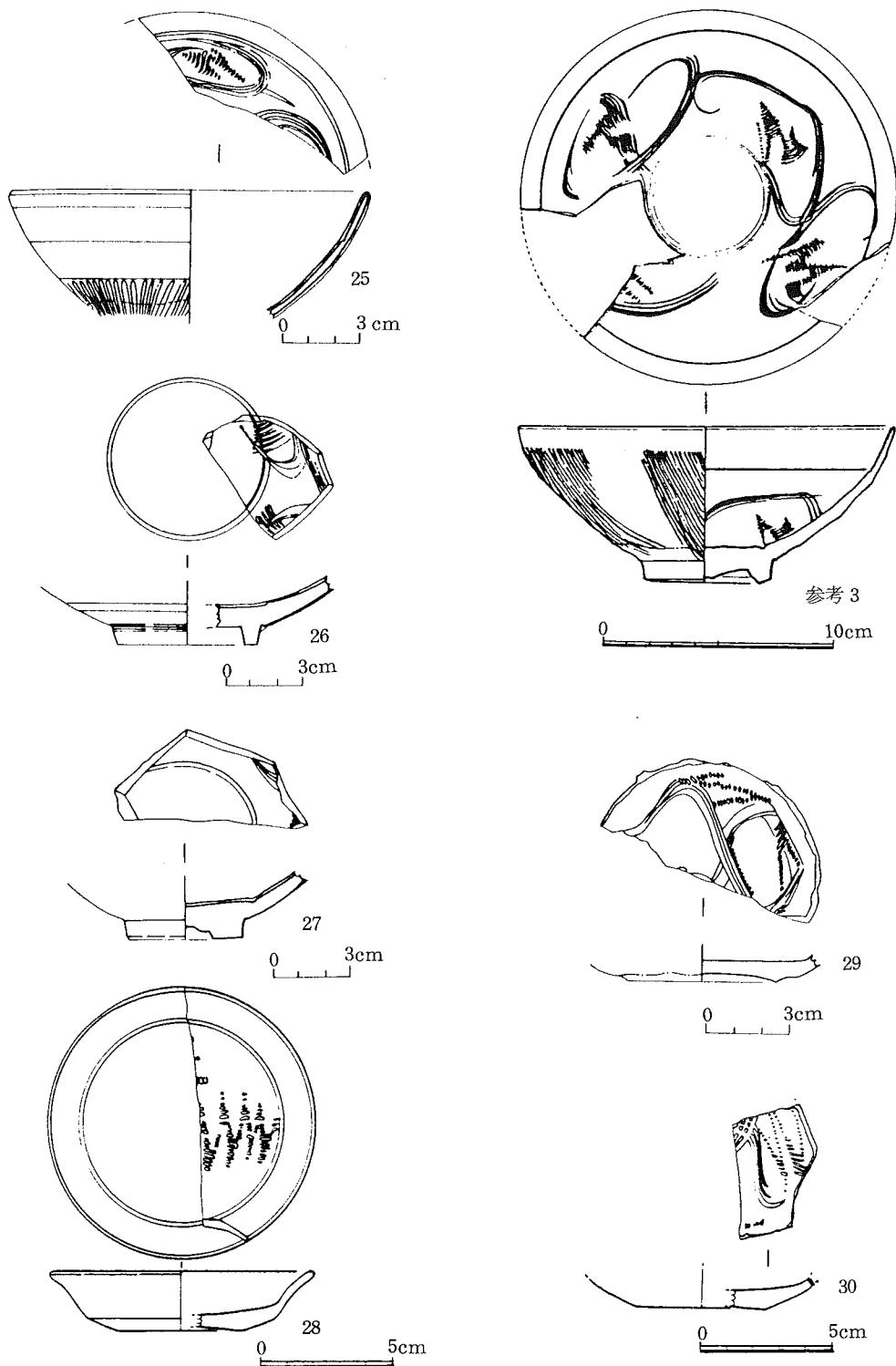


Fig. 8 青磁描文碗・皿 [稻福遺跡 25~27, 拝山遺跡 28・30, 野城遺跡 29, 参考 3 は大宰府史跡]

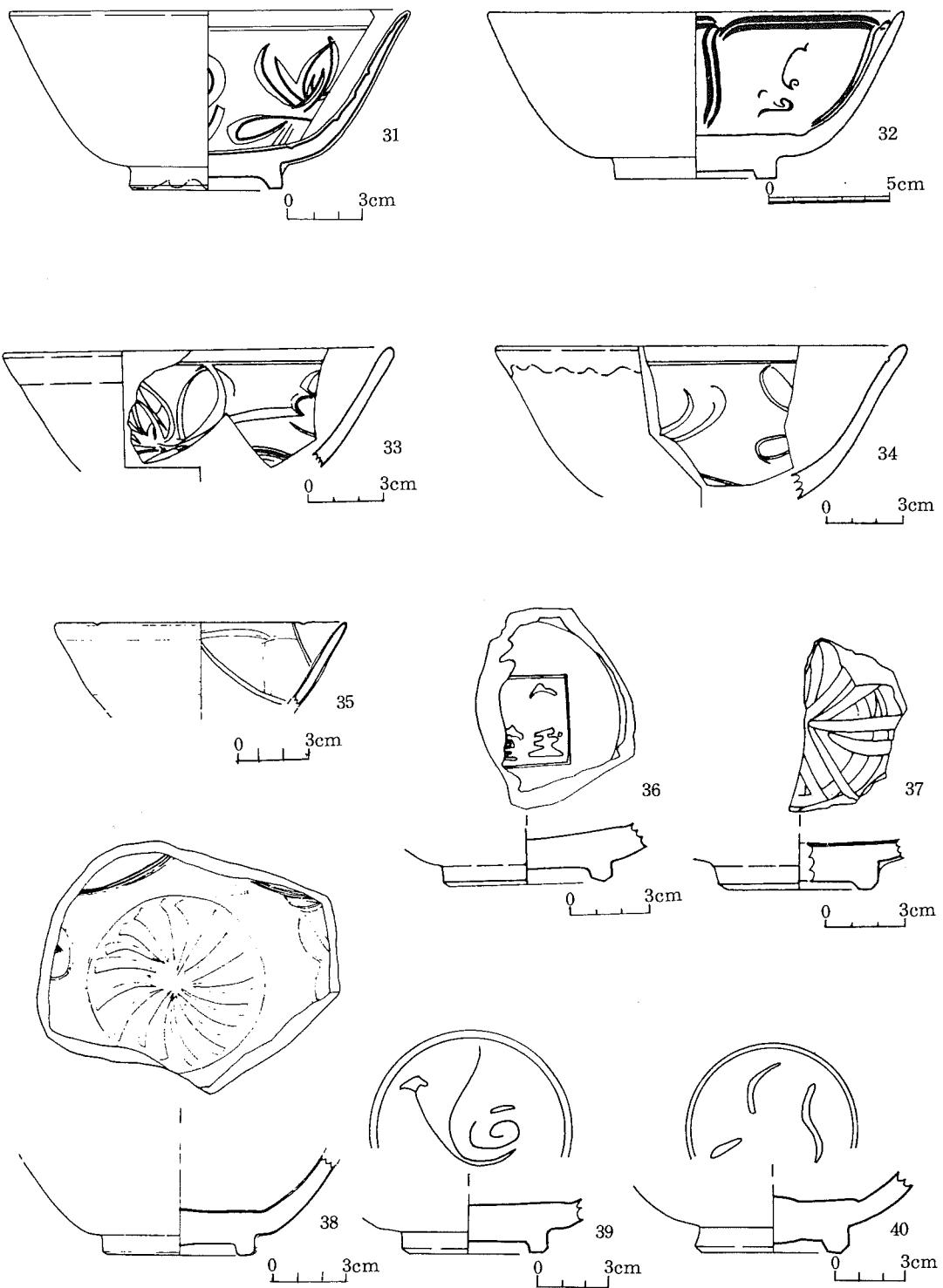


Fig. 9 青磁割花文碗 [ピロースク遺跡 31・39・40, クードー遺跡 32, 拝山遺跡 33・34・36・37, 我謝遺跡 35・38]

ある。

### ③ 鎬蓮弁文碗

龍泉窯系の青磁碗である。高台造りは劃花文碗とほぼ同じである。

41は今帰仁城跡主郭（俗称本丸）第9層（最下層）で検出された碗である。<sup>(27)</sup> 高台の内割りは浅く、底部の器肉が厚い。畳付は水平で幅が広い。内底から高台外面までは施釉されているが、畠付から外底までは露胎である。蓮弁の鎬は明瞭で、間弁もしっかりと描かれている。間弁をもつ鎬蓮弁は42・43の資料も同じである。

44・45はビロースク遺跡出土<sup>(21)</sup>の資料であるが、薄手の直口口縁で釉も薄く、間弁は簡略化されている。このような資料の報告はほとんどないが、13世紀に納まる資料と考えられる。

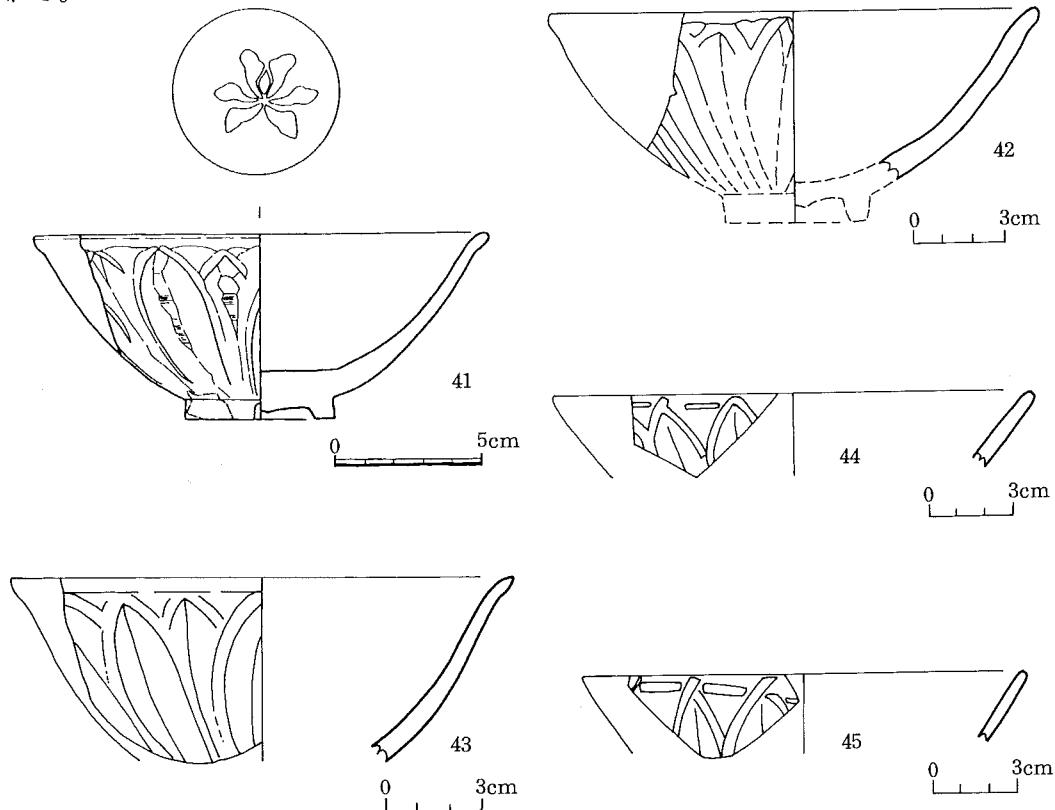


Fig. 10 青磁鎬蓮弁文碗〔今帰仁城跡 41・42, 佐敷グスク 43, ビロースク遺跡 44・45〕

### ④ 無文輪花碗

龍泉窯系で、口唇部に刻みを入れた輪花碗である。46は今帰仁城跡出土の資料であるが、全体的に器肉が薄く、高台も細く仕上げている。厚い青緑色釉を全体に施釉した後畠付の釉を削り取って露胎にしている。器形や釉調などから砧青磁の系統と考えられる。

無文輪花碗の出土例は少ないが、福岡市今津古墓出土<sup>(1)</sup>（13～14世紀）の無文輪花碗は

同じタイプと考えられる。

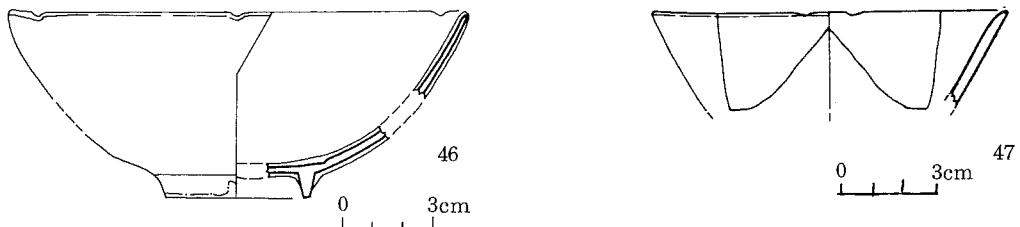


Fig. 11 青磁無文輪花碗〔今帰仁城跡 46, 我謝遺跡 47〕

#### ⑤ 腰折杯

龍泉系の腰折杯である。腰の折れが明瞭である。口縁も口折に仕上げてある。施釉は無文輪花碗と同じで、畳付だけ露胎である。48は今帰仁城跡出土の資料である。<sup>(19)</sup>沖縄での出土例があまりないので、参考4として大宰府史跡出土の資料を掲載した。この腰折杯を横田・森田氏は杯III類の中では最も古く編年している。<sup>(11)</sup>

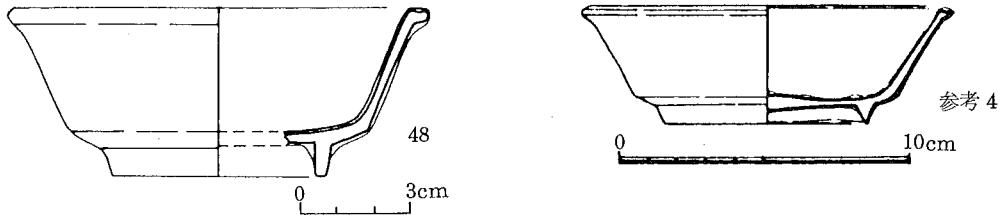


Fig. 12 青磁腰折杯〔今帰仁城跡 48, 参考4は大宰府史跡〕

#### ⑥ 口折皿

龍泉窯系の口折皿である。特徴は口折の稜線が明瞭で、口縁外端を僅かにつまみ上げる。<sup>(19)</sup>施釉方法は無文輪花碗や腰折杯と同じで、畳付だけ露胎である。49～51は今帰仁城跡出土。

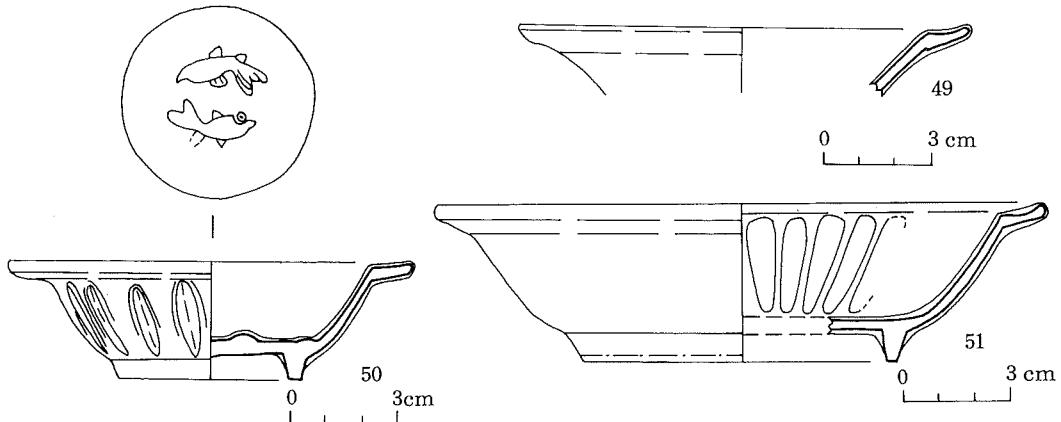


Fig. 13 青磁口折皿〔今帰仁城跡 49～51〕

この口折皿は3つに分けられる。

皿I 49の資料で、無文口折皿である。横田・森田編年の杯III類の3にあたる。<sup>(11)</sup>

皿II 50の資料で、外体面に鎧蓮弁文を廻らす。内底に貼付双魚文があるものもある。

横田・森田編年の杯III類の4にあたる。<sup>(11)</sup>

皿III 51の資料で、内体面に幅広の籠彫り蓮弁を廻らす。横田・森田編年にはないが、器型や施釉方法などから皿I・皿IIとほぼ同じ時期と考えられる。

### 3. 青白磁合子

景德鎮窯系の青白磁と考えられる。52は玻名城古島遺跡出土の資料であり、53は野城遺跡出土の資料である。<sup>(28)</sup> いずれも蓋の甲に印花花文が施文されている。二つの遺跡とも櫛描文（珠光青磁）が検出されているので、共伴遺物の可能性が強い。

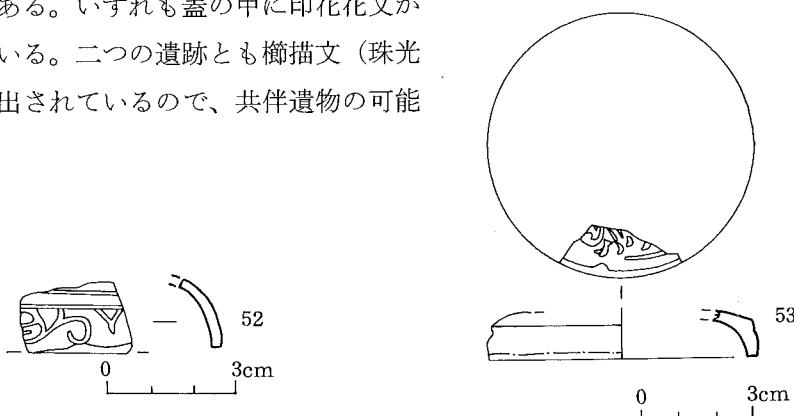


Fig. 14 青白磁合子蓋〔玻名城古島遺跡52, 野城遺跡53〕

### 4. 褐釉陶器

発掘調査で検出された褐釉陶器で、12・13世紀に編年できるものに壺、水注、鉢などがある。生産地は広東省佛山市奇石村桃源崗古窯などが有力視されている。<sup>(29)</sup>

壺 俗に南蛮壺とか呂宋壺とか言われているものはこの褐釉陶器壺である。四耳壺など耳付き壺が多い。<sup>(12)</sup> 54は熱田貝塚第Ⅲ層出土、<sup>(13)</sup> 55は新里村（東）遺跡第Ⅱ層出土、<sup>(14)</sup> 56は大泊浜貝塚第Ⅳ層出土、<sup>(15)</sup> 57は新里村（西）遺跡出土の資料である。口縁部は玉縁状に肥厚する。素地は薄い灰色で白色砂が混和されている。薄い黒褐釉が口縁部内面から外面底部脇まで施釉されている。施釉された釉は剥落が著しい。特に54は僅かに痕跡を残しているだけである。57は口径9cm、器高18cmの四耳壺で、肩部に白粉の目跡が廻っている。なお、新里村（東）遺跡出土の肩部破片に「清香」のスタンプ文字がある（PL. 2の6）。

水注 58は新里村（東）遺跡第Ⅱ層出土の資料である。口径10cm、高さが約25cmとして図上復元した。口縁は玉縁状に肥厚し、長頸状になってから胴部で張らむ器形と考え

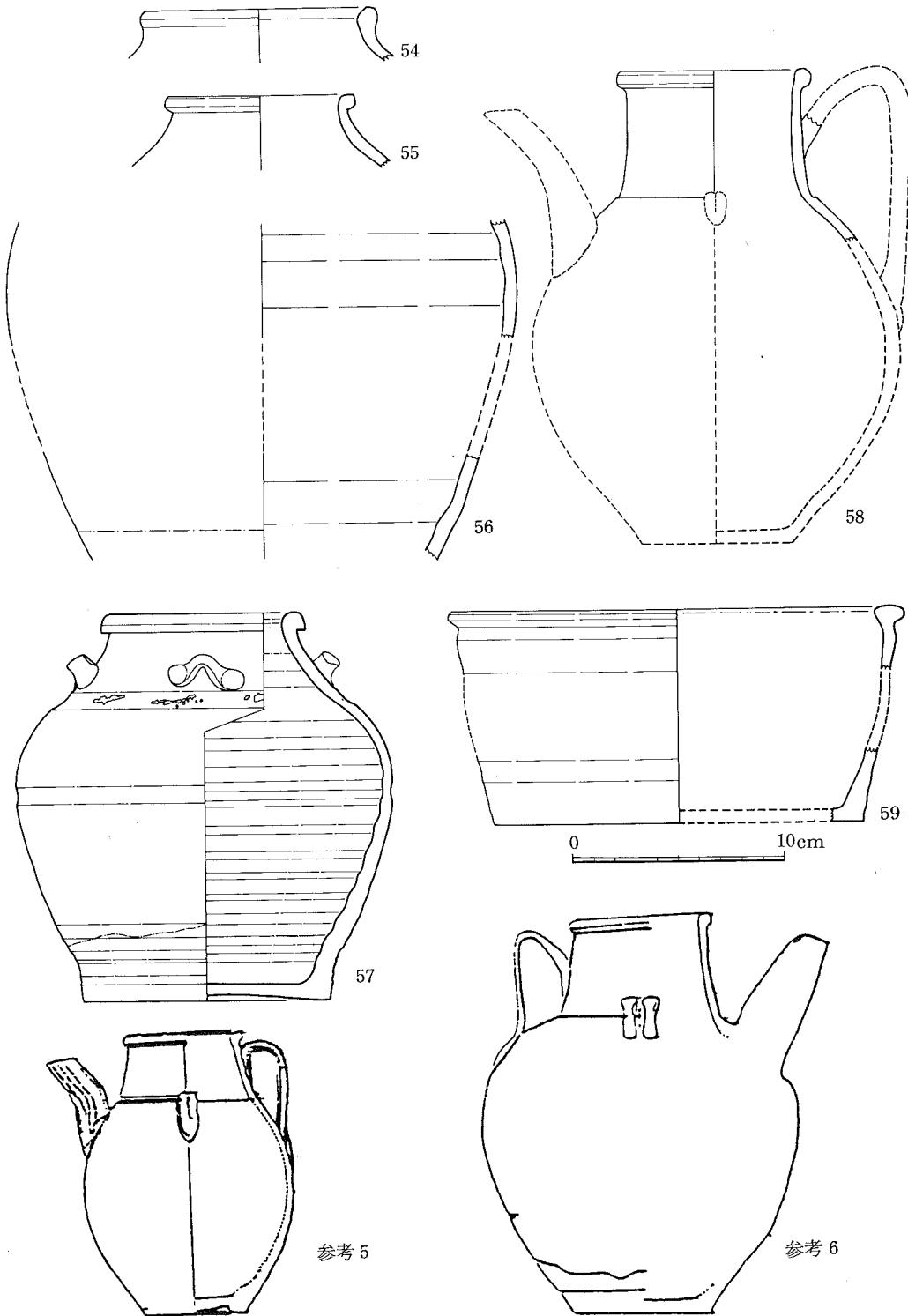


Fig. 15 褐釉陶器壺・水注・鉢〔熱田貝塚 54, 新里村(東)遺跡 55・58・59, 大泊浜貝塚 56, 新里村(西)遺跡 57, 参考 5 は博多聖福田寺跡〕

られる。把手の一部は残っているが、注口部は検出されていない。素地は薄い灰色で、白色砂が混和されている。黒褐色の薄い釉が頸部内面から外体面まで施釉されている。施釉された釉は剥落が著しい。

この水注と類似の水注として参考5(博多聖福寺)、参考6(熊本県福田寺跡)<sup>(30)</sup>の水注を掲載した。参考5は口縁が方形状の肥厚口縁で底が高台底である。参考6は口縁が玉縁状で底はベタ底である。今回の復元図58をベタ底にしたのは、新里村(東)遺跡と新里村(西)遺跡で出土した褐釉陶器の底部がすべてベタ底だったからである。

鉢59は新里村(東)遺跡出土<sup>(18)</sup>の資料である。口縁がT字状に肥厚し、内面だけに薄い褐釉を施しているのが大きな特徴である。矢部良明氏から「このような特徴をもつものに水指がある」との御教示を得たが、今回の資料は水指より低いので鉢として分類した。

#### 四 編 年

まず、編年の根拠になった遺跡の層序と共伴遺物を概観し、それに基づいて相対編年を試みることにする。

##### 1. 遺跡概観

###### ① 熱田貝塚

1978年、国道58号改良工事に伴う緊急発掘調査が実施された。本遺跡は標高約4mの砂丘上に形成されている。そこのハ地区(当時安富祖小中学校敷地内)第Ⅱ・Ⅲ層において白磁玉縁碗I、白磁端反碗、褐釉陶器壺、須恵器、滑石製石鍋(縦把手)、滑石製石鍋模造土器、開元通宝、刀子、勾玉などが共伴で検出された。<sup>(4)</sup>第Ⅱ層からは青磁無文外反碗の破片が2個検出されていることから若干の攪乱を受けているが、第Ⅲ層は未攪乱である。

これらのセット遺物は県内外から注目された。亀井氏は「…最近の沖縄県内における考古学的調査において、14世紀中葉以前の中国陶磁器を検出する遺跡が増加してきた。すでにこのことは多くの研究者が気づいていた点であるが1978年に行われた恩納村熱田貝塚の調査はその点で大きな意義を持っている」と熱田の意義を高く認めている。氏は発掘中に実見して「玉縁口縁の形態からみて本遺跡出土の白磁は12世紀代のものとみられる」と所見を述べている。

###### ② 大泊浜貝塚

1983~1985年、波照間島下田原地区において、下田原貝塚と大泊浜貝塚の範囲確認調査が実施された。大泊浜貝塚は砂丘に形成された無土器の貝塚である。その第4層(未攪乱層)において、白磁端反碗、褐釉陶器壺、須恵器、滑石製石鍋(縦把手)などがセット

で検出された<sup>(13)</sup>。この組み合せは熱田貝塚の組み合せと同じであり、編年の好材料である。熱田貝塚と同じように12世紀前半と考えられる。

### ③ 新里村（東）遺跡

1986年、竹富島の一一周道路工事に伴う緊急発掘調査が筆者らによって実施された。そのとき、新里村（東）遺跡第Ⅱ層で白磁玉縁碗ⅠとⅡ、白磁端反碗高台、白磁口禿小碗、白磁ビロースクタイプ碗、褐釉陶器壺・水注・鉢、須恵器、滑石製石鍋模造土器などが検出された。<sup>(18)</sup> この組み合せは12世紀後半～13世紀と幅があるようと考えられる。

### ④ ビロースク遺跡

1981・1982年、石垣市ビロースク遺跡の範囲確認調査が実施された。そのとき、第Ⅱ・Ⅲ層で白磁玉縁碗Ⅱ、青磁劃花文碗、青磁櫛描文皿（珠光青磁）、白磁ビロースクタイプ碗、須恵器、褐釉陶器壺などが共伴で検出された。<sup>(21)</sup> この組み合せから、12世紀末～13世紀と考えられる。

### ⑤ 今帰仁城跡主郭（俗称本丸）

1984～1986年、史跡今帰仁城跡の環境整備事業の一環として、主郭（俗称本丸）の発掘調査が筆者らによって実施された。そこの第9層（最下層）において、白磁口禿皿、白磁ビロースクタイプ碗、青磁鎬蓮弁文碗、青磁口折皿などが共伴で検出された。<sup>(27)</sup> まったく攪乱を受けていない層であり、13世紀末～14世紀初の中国陶磁器の組み合せと考えられる。

## 2. 編年試案

以上の層序的把握による中国陶磁器の組み合わせと、他の遺跡の報告書及び諸論文等を参考にして、つぎのような編年試案を作成してみた。実測図は上限と考えられるところに置いた。

① 熱田貝塚と大泊浜貝塚の出土状況から、白磁玉縁碗Ⅰ、白磁端反碗を12世紀前半と考えたい。しかし、大宰府史跡の資料で白磁玉縁碗Ⅰ・Ⅱが11世紀（1091年）の墨書銘を有する須恵器鉢と共に<sup>(11)</sup>、11世紀末まで上がる可能性はある。

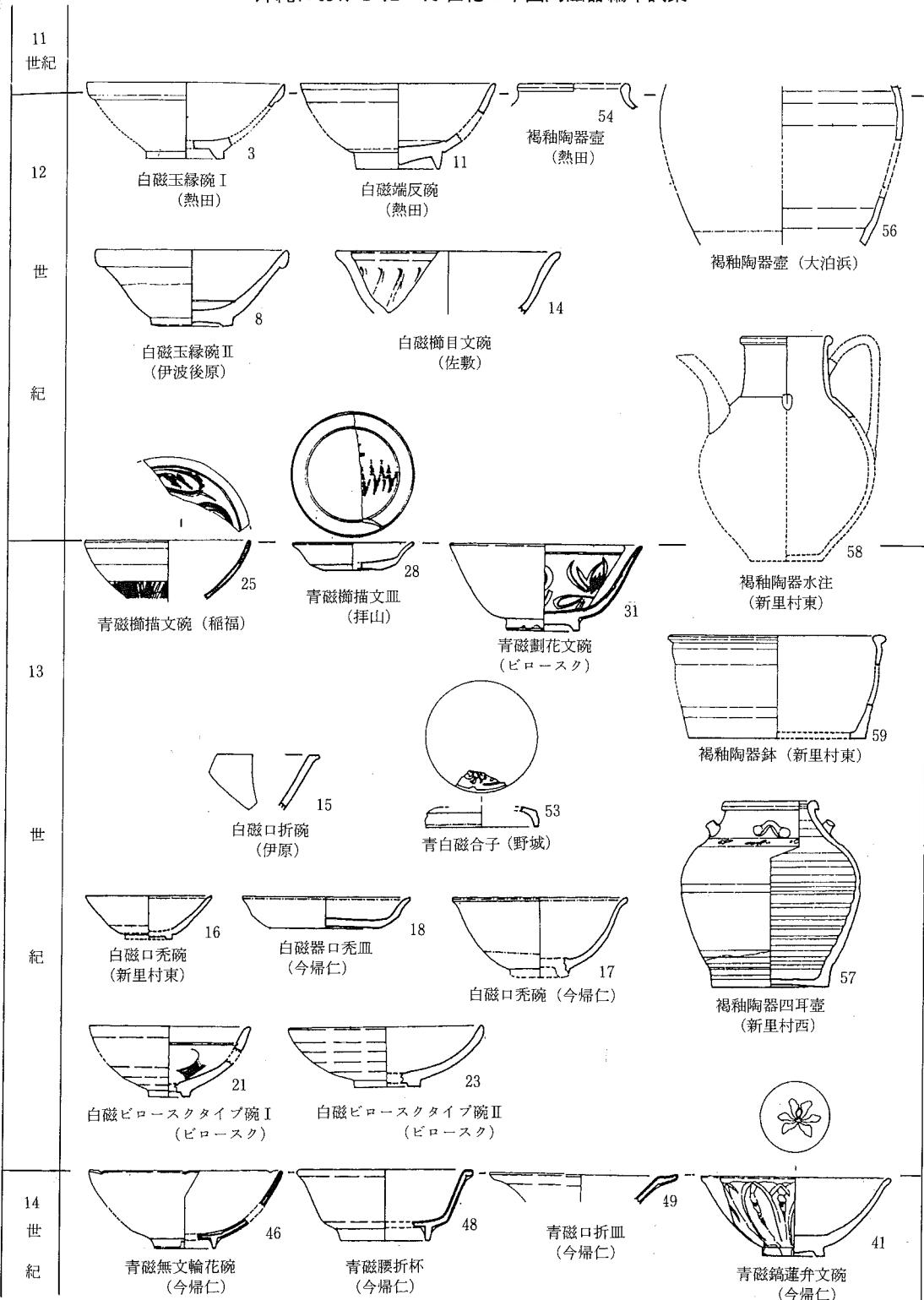
② 白磁玉縁碗Ⅱは12世紀後半～13世紀の遺物と共に出土しているのがほとんどで、12世紀前半まで上げることは現在のところむずかしい。12世紀後半としておく。

③ 褐釉陶器の壺は熱田貝塚と大泊浜貝塚から出土しており、この2点は12世紀前半と考えられる。しかし、このタイプの褐釉陶器は年代幅があり、14・15世紀まで続く。褐釉陶器の水注と鉢は新里村（東）遺跡の年代とあわせて12世紀末～13世紀と考えられる。

④ 青磁櫛描文碗・皿（珠光青磁）と青磁劃花文碗はビロースク遺跡、稻福遺跡、拝山遺跡などの出土状況（白磁玉縁碗Ⅱと共に）から12世紀末～13世紀と考えておく。

⑤ 白磁口禿碗・皿は新里村（東）遺跡出土の小碗が現在のところ最も古く、13世紀後

沖縄における12・13世紀の中国陶磁器編年試案



半と考えられる。口禿碗・皿の年代幅は13世紀後半～14世紀前半と考えておく。

⑥ 白磁ビロースクタイプ碗はビロースク遺跡第Ⅱ層、新里村（東）遺跡第Ⅱ層、今帰仁城跡主郭第9層から出土していることから、13世紀末～14世紀中葉と考えられる。

⑦ 青磁鎬蓮弁文碗は今帰仁城跡主郭第9層出土や、ビロースク遺跡の資料などから、13世紀末～14世紀前半と考えられる。

⑧ 青磁無文輪花碗は福岡市会津古墳出土<sup>(1)</sup>（13～14世紀）と同じタイプと考えられるので、13世紀末～14世紀前半とした。

⑨ 青磁腰折杯は大宰府史跡の資料と同じタイプであり、13世紀末～14世紀前半とした。<sup>(11)</sup>

⑩ 青磁口折皿は今帰仁城跡主郭第9層からも出土しており、また、大宰府史跡でも13世紀に出土していることから、13世紀末～14世紀前半と考えられる。

⑪ 白磁櫛目文碗、白磁口折碗、青白磁合子は層序的には明確でないが、共伴遺物を考えて配置した。

## 五 おわりに

熱田貝塚の発掘調査成果で筆者は「本遺跡は貝塚時代からグスク時代への移行期の遺跡で、今回の発掘で12世紀の沖縄がかなりわかつってきた」とグスク時代への移行期と位置づけた。その後、グスクの発掘調査等が数多く実施されているが、熱田貝塚相当期のグスクは現在のところ皆無である。

12世紀の中国陶磁器は白磁玉縁碗、白磁端反碗、褐釉陶器の3種類で、しかも出土量が僅かである（第1表）。中国貿易を考えるにはあまりに量が少ない。熱田貝塚<sup>(4)</sup>、サーク原遺跡<sup>(32)</sup>、大泊浜貝塚など<sup>(13)</sup>で白磁玉縁碗、滑石製石鍋、カムィヤキ系須恵器がセットで出土することから、九州経由で持ち込まれた可能性が考えられる。それは、博多港を中心とする博多遺跡群から白磁玉縁碗が多く出土することと関係があるのでなかろうか。この点について亀井氏は「……中国陶磁器は、日本（九州）商人経由で沖縄にもたらされたと想定するのは価格の点で不自然であろう」と否定的に考えている。<sup>(7)</sup>

12世紀末～13世紀初、沖縄のグスク時代が始まる。それと同時に、13世紀の青磁、白磁、褐釉陶器などの中国陶器が多く入ってくる。知念氏は「その出土状況は琉球國中山王が中国との進貢貿易を開始する以前にすでに交易関係にあったことを立証していると考えられる」と述べている。13世紀から14世紀中葉までの私貿易が、1372年の進貢貿易へと発展していくと考える点では筆者も同じである。

亀井氏は14世紀中葉以前の沖縄と中国との私貿易について3つの貿易形態を想定した。

A) 宋・元商船が、本島、宮古、八重山の主たる地に来航し、有力な按司等と交易。

B) 各地の有力按司等が宋・元へ交易船を発遣して交易。

C) 九州を中心とする日本商船の来航による交易。

そして、その中で、「沖縄の中国陶磁の入手方法のうち蓋然性の高いのは、AかBとなる」と述べている。<sup>(7)</sup> 上限を12世紀末～13世紀とするならば説得力のある想定である。

以上概観したように、沖縄における12・13世紀の中国陶磁器についてはいろいろな問題があり、その解明は今後の調査研究にかかっている。今回の分類と編年試案は、これまで筆者が直接に発掘調査した遺跡の資料を中心にまとめてみた。資料が不十分であり、これから補足、修正等が多いと思われるが、今後の中国陶磁研究に少しでも役立てば幸いである。諸学兄の御批正を得たい。

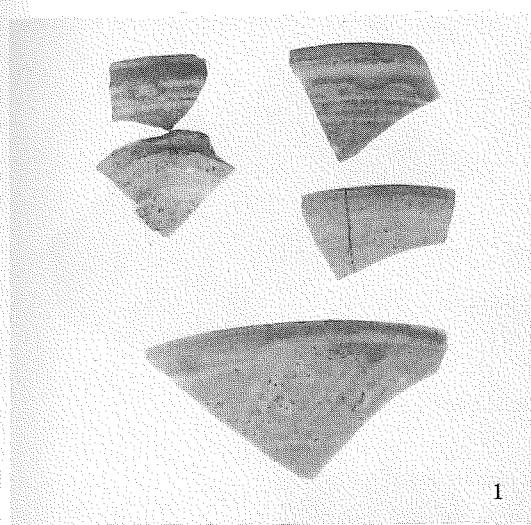
最後に沖縄出土の中国陶磁器について御教示くださった長谷部樂爾、亀井明徳、矢部良明、森田勉氏および写真、実測、トレース等で協力を得た宮里末廣、金城亀信、高良美千代の諸氏に謝意を表する。

- 註1、長谷部樂爾、矢部良明他『日本出土の中国陶磁』 東京国立博物館 1978  
2、金武正紀「仲間第一貝塚の開元通宝について」『南島考古だより』第13号 1974  
3、阿利直治他『崎枝赤崎貝塚』石垣市教育委員会 1987  
4、金武正紀『恩納村熱田貝塚発掘調査ニュース』沖縄県教育委員会 1978  
5、多和田真淳「琉球列島に於ける遺跡の土器、須恵器、磁器、瓦の時代区分」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会 1961  
6、三上次男『陶磁貿易史研究 上』－三上次男著作集1－ 中央美術出版 1987  
7、亀井明徳『日本貿易陶磁史の研究』同朋社出版 1986  
8、矢部良明「日本出土の元様式青花磁器について」『南島考古』第4号 沖縄考古学会 1975  
9、知念 勇「沖縄出土の中国陶磁について」『第1回中琉歴史関係国際学術会議論文集』中琉文化経済協会出版 1987  
10、嵩元政秀「ヒニ城の調査報告」『琉球文化財調査報告書』琉球政府文化財保護委員会 1966  
11、横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『研究論集4』九州歴史資料館 1978  
12、沖縄県教育委員会文化課保管の熱田貝塚出土品  
13、金武正紀他『下田原貝塚・大泊浜貝塚』沖縄県教育委員会 1986  
14、当真嗣一「石川市伊波後原遺跡調査概報」『南島考古』第4号 沖縄考古学会 1975  
15、沖縄県教育委員会文化課保管の新里村（西）遺跡出土品  
16、当真嗣一他『佐敷グスク』佐敷村教育委員会 1980  
17、島袋 洋他『伊原遺跡』沖縄県教育委員会 1986  
18、沖縄県教育委員会文化課保管の新里村（東）遺跡出土品  
19、金武正紀・宮里末廣他『今帰仁城跡発掘調査報告I』今帰仁村教育委員会 1983  
20、金武正紀「ビロースクタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』第8号 日本貿易陶磁研究会 1988  
21、金武正紀・阿利直治他『ビロースク遺跡』石垣市教育委員会 1983  
22、当真嗣一他『稻福遺跡発掘調査報告書』沖縄県教育委員会 1983  
23、座間味政光他『挾山遺跡』沖縄県教育委員会 1987

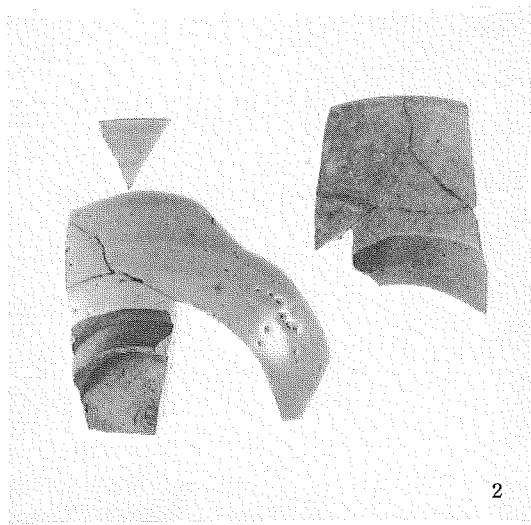
- 24、盛本 獻他『大牧遺跡・野城遺跡』城辺町教育委員会 1987
- 25、沖縄県教育委員会文化課保管のクードー遺跡表面採集資料
- 26、大城 慧他『我謝遺跡』西原町教育委員会 1982
- 27、今帰仁村教育委員会保管の今帰仁城跡主郭（俗称本丸）出土品
- 28、金城亀信他『具志頭村の遺跡』具志頭村教育委員会 1986
- 29、「広東石湾古窯跡調査」『考古』 中国科学出版社 1979
- 30、岡崎 敬「福岡（博多）聖福寺発見の遺物について一大陸舶載の陶磁と銀鋌」『九州文化史研究所紀要 13』 1968
- 31、『中国陶磁の美－熊本県出土の中国陶磁－』熊本県立美術館 1980
- 32、安里嗣淳・島弘他『砂辺サーク原遺跡』沖縄県教育委員会 1987
- 33、折尾 学・森本朝子他『博多Ⅱ－図版編一』福岡県教育委員会 1982

なお、上記以外に「中国陶磁器出土一覧」（第1表）に使った報告書等はつぎのとおり。

- 安里嗣淳・島弘他『伊良波東遺跡』豊見城村教育委員会 1987  
 安里嗣淳他『勝連城跡』勝連町教育委員会 1984  
 島袋友道他『郷土』第17号 沖縄大学学生文化協会 1979  
 宮城利旭・宮里信勇他『越來城』沖縄市教育委員会 1988  
 湖城 清『大里伊田慶名原遺跡』糸満市教育委員会 1983  
 下地安広『親富祖遺跡』浦添市教育委員会 1983  
 大城 慧他『竿若東遺跡緊急発掘調査報告』 1978  
 呉屋義勝他『喜友名遺跡群』宜野湾市教育委員会 1984  
 湖城 清『南山城跡第一次緊急発掘調査概要』糸満市教育委員会 1984  
 「阿波根古島遺跡」の表面採集資料は沖縄県教育委員会保管  
 「山原遺跡」出土の資料は石垣市教育委員会保管  
 金城亀信他『牧港貝塚・真久原遺跡』沖縄県教育委員会 1985  
 「屋良グスク」の出土品は沖縄県教育委員会で一時保管中  
 当真嗣一・下地安広他『浦添城跡発掘調査報告書』浦添市教育委員会 1985  
 友寄英一郎・嵩元政秀「フェンサ城貝塚調査概報」琉球大学法文学部紀要 1969  
 「高腰城跡」出土の資料は城辺町教育委員会保管



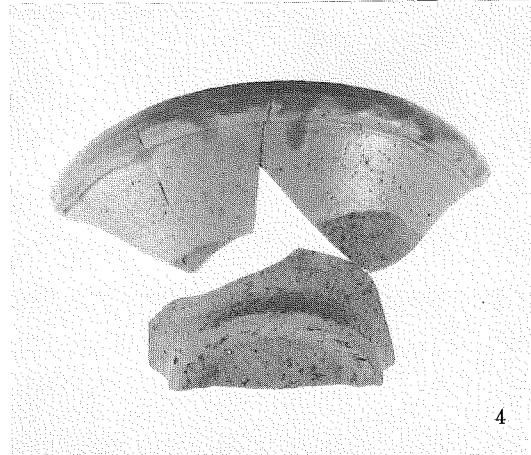
1



2



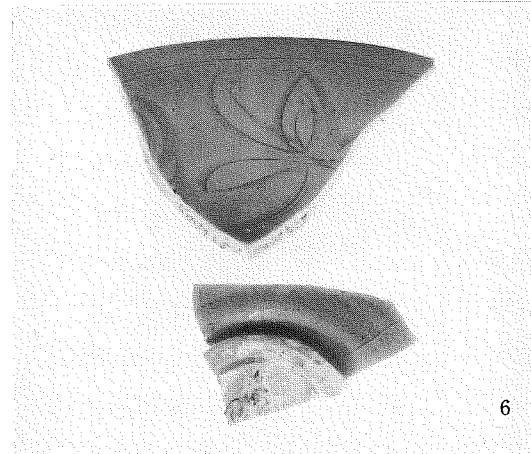
3



4



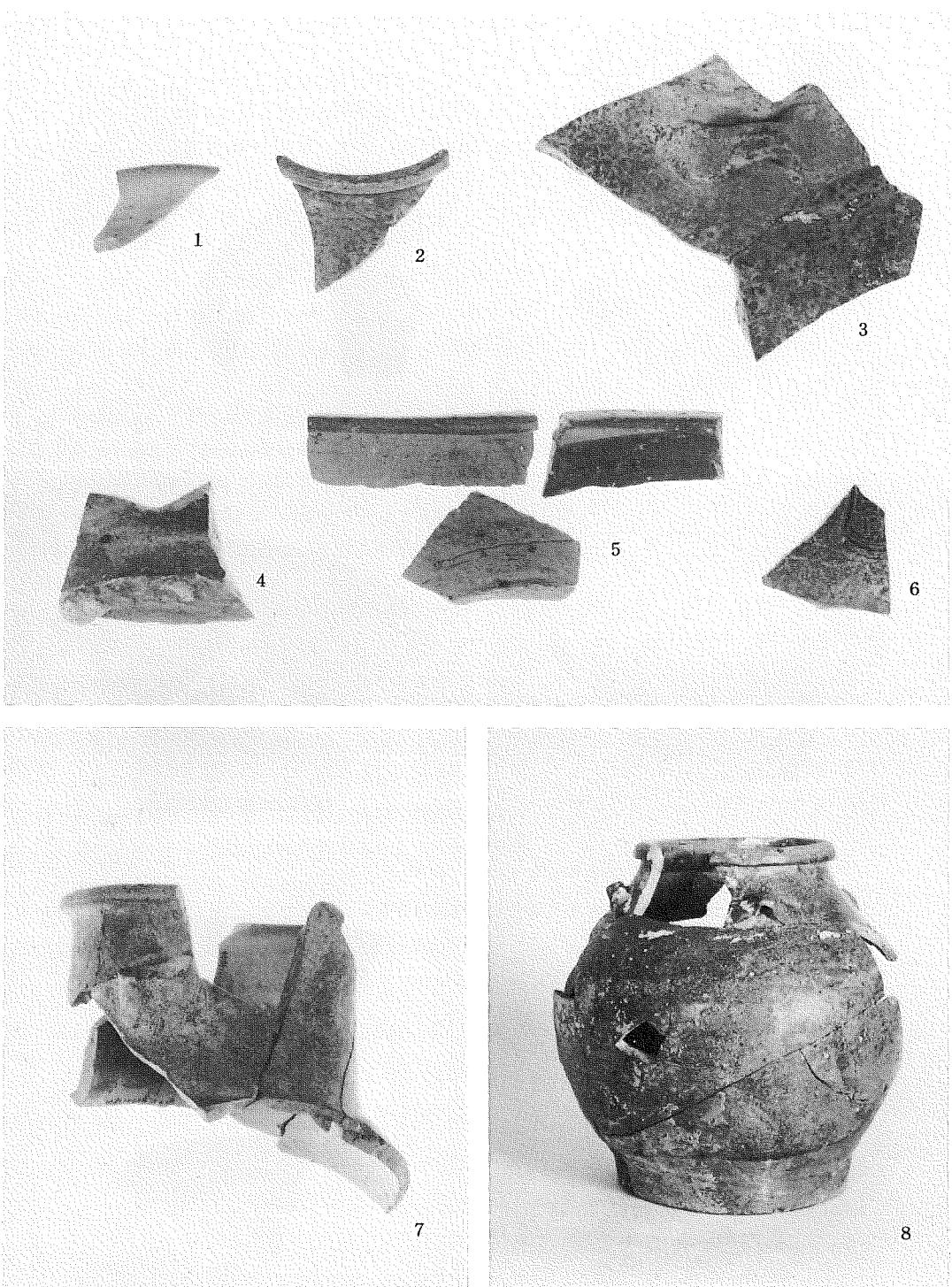
5



6

PL. 1 白磁碗 [1:玉縁碗 I (熱田), 2:端反碗 (熱田), 3:玉縁碗 II (伊波後原),  
4:玉縁碗 II (新里村西) ]

青磁碗 [5:割花文碗 (クードー), 6:割花文碗 (ビロースク) ]



PL. 2 褐釉陶器 [熱田貝塚1, 新里村(東)遺跡2~7, 新里村(西)遺跡8]

[1~4・6・8:壺, 5:鉢(上左は外面, 上右は内面, 下は底外面), 7:水注]